

## 家族論における「伝統」の扱われ方 近代朝鮮家族史の視点から

田中美彩都（東洋大学）

はじめに

韓国の家族はしばしば儒教的な伝統を強調する家族主義（以下、儒教的家族主義）により説明されるが、現代韓国の家族と儒教を国是として成立した朝鮮王朝（1392-1910）の家族を直接に結びつける議論には批判もある。本報告ではこうした韓国の家族論における儒教的家族主義を再考する先行研究を整理しつつ、近代、特に植民地期（1910-1945）の朝鮮史を専門とする立場から、儒教的家族主義をメタ的に議論し、日本との比較研究を行うための道筋を考えたい。

### 1. 儒教的家族主義への再考

韓国の儒教的家族主義を再考する研究には二つの方向性があるように思われる。

一つは、家族利己主義、縁故主義、閉鎖的な共同体主義のような儒教的家族主義の負の側面に対する批判を、儒学の根本に立ち返って乗り越えようとするものである。イム・ホンギョ（2012）は、こうした批判が起こる背景として儒教への理解が表層的なものに留まっているためであり、本来の儒教的家族主義は上記の負の要素を排斥するための思想だと主張する。

いま一つの方向性は、儒教的家族主義を「創られた伝統」とみるものである。金東春（2002）は、親族中心の血縁関係を社会関係の中心に置く韓国の家族主義が儒教的要素をもつことは認めながらも、儒教的家族主義が強化された背景を、朝鮮王朝ではなく、植民地支配、朝鮮戦争、産業化といった近現代の社会変動に求めた。

植民地支配の影響については、日本がもたらした戸主制度と朝鮮王朝の家父長制が結合することによって「伝統」が生まれたという指摘が梁鉉娥（2011）らによってなされている。また金環鎬（2020）は、植民地期に日本が朝鮮の後進性を主張するために朝鮮の「野蛮な」儒教的家族像を創出し、日本の「文明的な」家族概念を朝鮮に導入したことが、今なお韓国の家族論に影響を及ぼしていると指摘する。

### 2. 近代朝鮮家族史の文脈における「伝統」の再考

報告者もまた韓国の儒教的家族主義が植民地支配以降の韓国朝鮮がたどった史の変遷による産物だという指摘に同意するが、「伝統」創出の経路と現在の位置付けを解明するための課題はまだ残されていると考える。

例えば鄭智泳（2022）は、朝鮮の家族史の通説となって久しい大家族主義が、やはり植民地期の日本人学者が朝鮮の後進性を指摘するために創出した「ファンタジー」だと指摘する。しかし朝鮮大家族論が通説化する過程をみるうえで、これを受容し発展させた韓国の家族史研究の歴史にも目配りする必要があるだろう。

また植民地期朝鮮の家族にまつわる政策や言説を、日本対朝鮮の二項対立で理解することは一見分かりやすいが、単純化のあまり状況を見誤る可能性もあるのではないか。陥穽に嵌らないためにも、そして儒教的家族主義が生じた土壌を明らかにするためにも、近代（この場合、植民地期のほか、朝鮮王朝が開港して植民地化に至るまでの開港期も含む）の朝鮮の家族の実態に迫る研究が一層進められなければならない。

おわりに

上述の通り、韓国の儒教的家族主義の創出に近現代日本が果たした役割は決して小さくない。その近現代日本の家族史研究・研究史との比較を通して、韓国家族の儒教的家族主義にひそむ、伝統と近代、植民地性の問題を解きほぐし理解するための端緒を得られればと思う。

参考文献

金環鎬（2020）「韓国社会の「家族主義」ディスコースと「儒教家族主義」に対する省察」『民族文化研究』86

金東春（2002）「儒教と韓国の家族主義—家族主義は儒教的価値の産物か？」『経済と社会』55

梁鉉娥（2011）『韓国家族法読解—伝統、植民地性、ジェンダーの交差点で』創批

鄭智泳（2022）「朝鮮大家族論を再考する」小浜正子・落合恵美子編『東アジアは「儒教社会」か？』京都大学出版会

キーワード：家族主義、儒教伝統、植民地支配